

米国の実験学校 Lincoln School における音楽教育に関する研究

—S. N. Coleman の音楽教育実践を中心として—

藤井 皓子

(本講座大学院博士課程前期在学)

A Study on Music Education in Lincoln School of Teachers College Columbia University: Focusing on the Practices of S. N. Coleman

Hiroko FUJII

1. はじめに

米国では19世紀末から20世紀初頭にかけて、公教育制度が量的・質的に整えられるとともに、それまでの画一的な教育制度と教育方法への批判が起こり、教育の個別化・個性化が主張され始めた。この動向は、それまでの教育を抜本的に捉えなおそうとして展開された、新教育運動に起因している。また、1896年にシカゴ大学附属実験学校として Dewey School が附設されたことを契機に、実験学校運動が展開された。実験学校は、大学等で開発された教育理論を教育実践によって論証し、教育理論の構築を目指すものであり、教育実習生や視察者等を通じて全米の学校に大きな影響を与えた。代表的な実験学校として、シカゴ大学附属の Dewey School, Parker School, ミズーリ大学附属の Meriam School, コロンビア大学附属の Horace Mann School, Speyer School, Lincoln School が知られている。19世紀末から20世紀初頭の教育は、上記の教育改革によって、子どもの興味や関心に基づき、学習経験を重視する教育に移行しつつあったといえる。

これらの大規模な教育界の転換は、音楽教育界にも影響を与えた。カリキュラムの標準化を求め、初等学校に設置された唱歌科は、1921年に音楽科へ転換することとなる¹⁾。この唱歌科から音楽科への転換は、上記の実験学校での研究と実践の所産によるものである。本稿で扱う実験学校 Lincoln School の音楽教育は、創造的音楽 Creative Music という楽器づくりを中心とした学習活動が行われたことによって注目された。その指導者が S. N. Coleman (以下, Coleman) であり、彼女の音楽教育は著書や論文によって広く知られている。Lincoln School の音楽教育および Coleman の音楽教育に関する先行研究には、Rugg & Shumaker (1969)、佐藤 (1990)、Boston (1992)、Volk (1996)、桂 (1998)、橋本 (2000)、Southcott (2009)、丸林 (2010) が挙げられる。先行研究では、Coleman の著書や論文から彼女の教育の特徴や教育観については言及しているものはあるが、Lincoln School での彼女の教育やその学習の展開方法までは明らかにされていない。そこで本稿では、これまで明らかにされていなかった米国の音楽科教育展開史の一端を明らかにするという目的のもと、Lincoln School の音楽教育について検討している。同校のカリキュラムにおける音楽科の位置と音楽科における音楽教育実践という2点の視点から検討および考察を行った。

2. Lincoln School の学校制度やカリキュラム

Lincoln School は、1917年にコロンビア大学に附設された実験学校である。Lincoln School の設立から10年間は、「主事 Caldwell の自由放任主義の下、各教員が先頭に立ち、すばらしいカリキュラムが作成された」²⁾と評されるように、公立学校に大きな影響を与えるような実験学校であった。同校の代表的な実

¹⁾ 荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房, 2001, p.7.

²⁾ Buttenwieser, P. L., *The Lincoln School and Its Times, 1917-1948*, Columbia University, Ed. D., 1969, abstract.

践として、H. Mearns による創作詩、E. Rugg の総合社会科、そして初等学校で開発された作業単元 Unit of Work の概念が挙げられる。しかしその後、1930年代より、主事の交代やスタッフの大幅な異動、教育実践と研究の分離化等で、実験学校としての意味を失い始めた。また、大学が財政的危機に陥ったこと等の理由で1940年には Horace Mann School との合併を迫られ、Horace Mann-Lincoln School となったものの、同校で行われた研究成果が公立学校に適応し難いこと等が指摘され、1948年、閉校となる³。

以下より、Lincoln School 出版の書籍にみられる、音楽科の特徴等について述べる。

2-1 A Descriptive Booklet (1922)⁴ および A Descriptive Booklet (1925)⁵

(1) Lincoln School の学校編成

Lincoln School は、小学校（第1学年から第6学年）、中学校（第7学年から第9学年）、ハイスクール（第10学年から第12学年）の3期に分けられている。A Descriptive Booklet (1922) および (1925) に示されたそれぞれの時間割を検討した結果、以下の特徴がみられた。

小学校における教育では、読み・書き・計算の基礎的な能力を育成するための学習と、他者意識をもって学習する資質育成の2点が重視されている。小学校のカリキュラムは、「同一スタッフが同一クラスを継続して担任するシステムを採用」⁶ しているために、中学校やハイスクールの時間割とは枠組みが異なり、児童のニーズに早急に対応できるよう配慮された構成であった。

中学校では、生徒の生活に関連しつつ、幅広い経験と活動を与えるような内容で構成され、それに関する情報を提供することが考慮されていた。また、第7学年から選択科目、および専科の教師による指導が始まることも特徴の1つとして挙げられる。

ハイスクールは一般的な中等学校よりも、科学、文学、言語、数学、歴史等、の学習を重視する意向のもと編成されている。Lincoln School に在籍する生徒はほとんど大学に進学するため、それを念頭に置いた学習が展開されている。

(2) 音楽科の内容

1) 音楽科の時間配置

小学校では児童の興味や関心に沿い、生活経験を重視した学習内容で構成されているため、音楽科は、その一部としてカリキュラムに編成されている。小学校では、週あたり2コマ、1コマあたり30分音楽の授業が行われている。中学校では生徒のニーズに応じながらも教科を中心とする構成をとり、2クラス合同で音楽科の学習が展開されている。中学校では、週あたり1コマ、1コマあたり50分音楽の授業が行われている。一方、ハイスクールでは、音楽科はカリキュラムに示されていない。

2) 音楽科の学習領域

音楽科の内容は、「A. 歌唱」と「B. 創造的音楽」の2領域、ならびに「オーケストラ」の内容で構成されている。「B. 創造的音楽」に示された、第4学年から第6学年の学習主題を比較した結果、同学年では学習の連続性が認められるが、学年間の発展性や系統性はみられないことが明らかとなった。

3) 他教科との相関性

「A. 歌唱」と「B. 創造的音楽」の活動は、他教科と相互に関連しながら行うよう指示されている。「A. 歌唱」の活動では、「歌曲の選択が可能な場合、他の授業の学習と関連させる。」⁷ と示され、「B. 創造的音楽」の活動では、技術、美術、ダンス、科学、自然学習、神話学、民族学、英語といった教科と関連づけられていた。

³ 松村将「リンカーン・スクール—その歴史と意義—」『京都女子大学教育学科紀要』第43号、2003、pp.87-100。

⁴ Lincoln School, *A Descriptive Booklet*, The Lincoln School of Teachers College, 1922.

⁵ Lincoln School, *A Descriptive Booklet*, The Lincoln School of Teachers College, 1925.

⁶ 前掲書3、p.91。

⁷ Lincoln School, op. cit., 1922, p.60.

2-2 *Some Uses of Assemblies* (1922)⁸

(1) 集会の種類

Lincoln School では、主に 5 種類の集会が行われていた⁹。そのうち 2 種類で音楽活動が行われ、この 2 種類の音楽活動は教科外活動でありながら、音楽科における学習と同等の活動が行われていた。

D 芸術家・専門家によるプログラムの大部分は、「音楽に関するもの」¹⁰ であり、その内容については、「何らかの特別な主題に関して、外部者によってもたらされるもの、もしくは教師によって話されるプログラムである」¹¹ と示されている。同プログラムの内容を検討すると、音楽的知識の獲得、獲得した知識をもとに音楽を感受する、その鑑賞をもとに議論や学習によって知識や音楽の内容を再構築するという、3 つの段階を経て展開されていたことがわかった。

E 練習のための音楽集会では、本番を想定したリハーサルとしての活動が中心に行われていた。これは、リハーサルをすることによって、音楽の技術的な問題を認識し、演奏の改善につなげる意図があった。演奏者としての育成を行う一方で、「注意深く、賢く、礼儀正しく聴く学習を行うことによって、聴取者はその役割を担っているという有益な社会的経験に達する。」¹² という記述から、鑑賞者としての態度育成にも寄与していたことがわかる。

(2) 集会におけるオーケストラ活動

集会におけるオーケストラ活動は、*Some Uses of Assemblies* では示されていないが、*A Descriptive Booklet* (1922) や *A Descriptive Booklet* (1925)、*A Children's Symphony* (1931)¹³ の記述から、集会でオーケストラ活動が行われていたことは確かである。Lincoln School は、オーケストラ活動を特別活動の一活動として重要なものであると解している。また、Coleman はオーケストラの活動意義について、「良いスクール・オーケストラは、音楽経験を豊かにし、メンバーとしての社会生活を豊かに」¹⁴ するものであると述べている。

2-3 *Curriculum Making in an Elementary School* (1927)¹⁵

(1) 作業単元の内容

作業単元¹⁶は、児童の発達段階、興味や関心、生活の状況に即して設定されるために、その内容は多岐にわたる。*Curriculum Making in an Elementary School* では、計 13 の作業単元について詳述されているが、この 13 の作業単元を「大単元」と捉えれば、その他に「小単元」が多数存在する。同書では作業単元として採用するにあたり、8 つの基準が示されており¹⁷、その内容を検討すると、児童の発達段階や興味・関心に根ざしたものであること、個人差を考慮したものであること、社会的行動の素質を育むものであること、作業単元が連続性・継続性のある学習であるべきこと等が考慮されていたことが明らかとなった。

(2) 作業単元における音楽科のカリキュラムと学習内容

「大単元」である作業単元を学習の内容別に、①教科の学習（以下、①音楽科）、②教科の学習ではないが、作業単元に関連した活動（以下、②音楽関連学習）、の 2 つに分類し、検討した。

①音楽科の内容は、作業単元に関連する歌を取り上げ、その歌を歌うことと、演奏発表を目標にした創作が主な活動であった。

②音楽関連学習の内容は、作業単元に関わる話を劇化する dramatizing 活動、ごっこ遊び dramatic play や劇を行う活動が主である。劇化する活動は、作業単元のテーマに関連する歌を歌うこと、テーマに関連

⁸ The Lincoln School of Teachers College, *Some Uses of School Assemblies*, The Lincoln School of Teachers College 425 West 123rd Street, 1922.

⁹ Ibid., pp. 5-22.

¹⁰ Ibid., p. 19.

¹¹ Ibid.

¹² Ibid.

¹³ Coleman, S. N., *A Children's Symphony*, Bureau of publications of Teachers College Columbia University, 1931.

¹⁴ Ibid., p. 29.

¹⁵ The Staff of the Elementary Division of the Lincoln School of Teachers College Columbia University, *Curriculum Making in an Elementary School*, Ginn and Company, 1927.

¹⁶ 佐藤 (1990) は作業単元を、「興味を中心に主題として教材と活動を組織した、総合学習の様式」と定義している。佐藤学『米国カリキュラム改造史研究—単元学習の創造—』東京大学出版会, 1990, p. 186.

¹⁷ The Staff of the Elementary Division of the Lincoln School of Teachers College Columbia University, op. cit., pp. 31-41.

した曲を創作することが主な活動内容であった。

(3) 1925年から1926年における音楽科の内容

第1学年から第6学年までの学習内容を概観し、その学習内容を2学年ごとに、低学年・中学年・高学年と区切り検討した結果、それぞれの特徴がみられた。

低学年では「歌唱に関する学習」、「創作に関する学習」、「リズムに関する学習」が行われている。低学年では、ごっこ遊びや劇が多く展開されているために、その活動に付随する音楽づくりや創作が重要視されている。

中学年では、「歌唱に関する学習」、「創作に関する学習」、「器楽演奏に関する学習」、「創造的音楽に関する学習」が行われている。中学年では、楽器の歴史を辿りながら、その構造や発音体、原始から初期の音楽史の学習が展開され、他国の音楽文化の理解に深く関連しているといえる。

高学年では、「歌唱に関する学習」、「創作に関する学習」、「器楽演奏に関する学習」、「創造的音楽に関する学習」が行われている。高学年では、楽器づくりとその楽器で演奏する記述が多い。学年進行に伴い楽器の種類も多様化している。

3. Colemanの音楽教育実践

Colemanは1878年に生まれ、一般の学校を卒業後、1915年からワシントンD. C.の自宅で私設教室を開き¹⁸、1918年には私設教室をニューヨークに移し、実験的な研究を続けた。1919年からLincoln Schoolの音楽科教師として勤務する。彼女の音楽教育を代表する用語「創造的音楽」は、同時期の音楽教育界に新たな指針を示し、全米に広く認識された。1942年、Lincoln Schoolとコロンビア大学Teachers Collegeの職を退き、1961年にその生涯を閉じた¹⁹。

以下より、Colemanの著書にみられる音楽教育実践について述べる。

3-1 初期の出版物

Colemanの著書*Creative Music for Children* (1922)²⁰と*Creative Music for Schools* (1925)²¹を初期の出版物と捉え、2冊にみられる音楽教育の特徴を、以下にまとめる。

Colemanの指導観

*Creative Music for Children*の「教師への提案」では、創造的音楽を行う教師に対して「目標、教材、方法論、指導技術」に対する提言を行っている²²。この記述にColemanが考える、教師のあるべき姿や教育に対する考え方等を含む、彼女の指導観が端的に示されている。その記述をみると、「目標」では、教師は教育的視点を持ち、その視点を子どもの達成すべき目標に設定し、教材を配置するべきであると述べている。「教材」では、「子どもに理解できるものであり、扱いやすいこと」²³を適切な教材の条件に挙げ、教材が子どもの能力に適合しているか判断することが必要であると述べている。「方法論」では、教材が適切なものであれば、方法が思いつきで行われることなく、また、それが子どもの興味を引くものであれば、あえて工夫する必要も無いと述べている。「指導技術」では、指導方法は定式化できないとしながら、指導技術の1つとして、子どもに興味をもたせ続けるよう配慮することを挙げ、教師はそのため学習の環境を設定すべきであると述べている。

リズム感を育成する学習活動

Colemanは、「音楽の基本はリズムであることは周知の事実である。…私は、子どもがリズムカルに歌い、演奏できるようになる前に、身体でリズムを感じる必要性を認識したため、何年も前から自分の音楽教育にそれを取り入れ、音楽レッスンの一部をその活動に充てている。」²⁴と示し、リズム感の育成を重視

¹⁸ Coleman, *A Children's Symphony*, op. cit., p.16.

¹⁹ Boston, C. SATIS. N. COLEMAN (1878-1961) Her Career in Music Education, Ph.D. Dissertation, University of Maryland College Park, 1992.

²⁰ Coleman, S. N., *Creative Music for Children*, G. P. Putnam's Sons, 1922.

²¹ Coleman, S. N., *Creative Music for Schools, Book 1, The Beginning of Music: The Making and Use of Instruments for Rhythm*, The Lincoln School Experiment Edition Book1, 1925.

²² Coleman, *Creative Music for Children*, op. cit., p.210-213.

²³ Ibid., p.210.

²⁴ Ibid., p.82.

していたことを述べている。ドラムを中心として展開される30のエクササイズでは、前半のエクササイズでは身体表現を伴ったリズム学習が行われ、後半のエクササイズではドラムを用いて模倣演奏をする活動やアンサンブルを伴う活動が行われている²⁵。また、*Creative Music for Schools*の記述でも、学習の初期では特にリズム活動が重視されていることがわかる。これらのことから、Colemanの展開する音楽教育では、始めに身体活動を伴うリズム学習が展開され、徐々に歌唱や器楽演奏に移行していたとすることができる。

3-2 Creative Music Series

Creative Music Series は、*First Steps in Playing and Composing* (1930)²⁶、*The Marimba Book* (1930)²⁷、*The Drum Book* (1931)²⁸、の計3冊から成るシリーズの書籍である。これらの書籍は、「授業で児童に音読させ、テキストに示されている議論と実験のために立ち止まり、さまざまなオリジナルのアイデアと表現を行うよう奨励することである」²⁹と示されていることから、Lincoln Schoolでテキストブックとして使われていたものであると考えられる。*Creative Music Series*の記述を、活動の内容別に分け、5つの視点から検討した。

楽器づくり

*Creative Music Series*における楽器づくりは、グラス、マリмба、ドラムを中心に行われており、これらはすべて打楽器である。楽器づくりの初期段階では、グラスを調節する活動が行われ、学年進行に伴って、マリмбаづくりの活動、ドラムづくりの活動へと展開する。

グラスを中心とする活動では、グラスに水を入れて調節する作業が主な内容であるため、楽器づくりというよりも、より簡易的な内容である。初期に行われる活動ということもあり、幼い児童にとっても道具を使わずにでき、音楽的な能力がなくとも行うことのできる活動である。

マリмбаづくりの行程は、主に音板に関する11の実験に準じている。マリмбаづくりの活動では、結節点を見つけることと、木片を音板にする実験が重視されており、この2つの実験はマリмбаづくりの主活動であったといえる。

ドラムづくりの工程は、材料探しや材料決め、ドラムの胴を準備する、鼓面の皮を用意する、ドラムの胴に皮を固定する、装飾する活動が行われていた。ドラムづくりでは、音高を調節するという活動はほとんど示されない代わりに、ドラムを何で作るかという材料の選択が重視されていた。

歌唱活動

Colemanは*Creative Music for Children*において、歌唱活動は基本的な活動であり演奏より前に歌うことが適切であると述べている。しかし、*Creative Music Series*では既習の歌を歌う活動や楽器の演奏と共に歌う活動は示されているものの、歌唱のみの活動についてはほとんど示されていない。

即興演奏や創作活動（基本的な音楽的知識に関する学習や数字譜の学習）

*Creative Music for Children*では、「学習の各過程で、創作を行うための明確な指示を出していた」³⁰と示されるように、常に即興・創作活動を行うよう彼女が指示していたことは明らかである。*Creative Music Series*では、即興・創作活動をはじめとして、歌唱活動や演奏活動等、すべての音楽活動において、即興や創作の学習がねらいにあった。即興・創作活動に関連して、基本的な音楽的知識に関する学習や数字譜の学習が平行して行われていた。

器楽演奏（アンサンブル活動）

*Creative Music Series*での器楽演奏は、おおよそ単音から3音の音域で始められることが特徴的であり、その後5音、1オクターブと拡大される。また、グラス・オーケストラ、マリмба・オーケストラ、ドラム・オーケストラ等の記述があるために、*Creative Music Series*で示された楽器の学習では、合奏の活動

²⁵ Coleman, *Creative Music for Schools, Book 1, The Beginning of Music: The Making and Use of Instruments for Rhythm*, op. cit., pp.81-92.

²⁶ Coleman, S. N., *First Steps in Playing and Composing*, The John Day Company, 1930.

²⁷ Coleman, S. N., *The Marimba Book*, The John Day Company, 1930.

²⁸ Coleman, S. N., *The Drum Book*, The John Day Company, 1931.

²⁹ Coleman, *The Marimba Book*, op. cit., p.103.

³⁰ Coleman, *Creative Music for Children*, op. cit., p.122.

が意図されていたことがわかる。

聴取活動

Creative Music Series では、いわゆる音楽鑑賞の活動は示されていない。*Creative Music Series* での鑑賞活動は、音を聴き分けるといった非常に単純な活動のみが設定してある。この聴取の活動では、楽器づくりにおいて、グラスや音板、ドラムの音高を聴き分け、その音が自分のねらっている音と合致しているか認識し、その音を上げるか下げるかという判断が行われているといえる。

3-3 A Children's Symphony (1931)

A Children's Symphony にみられる音楽教育の特徴を以下にまとめた。

市販の楽器を使用することに関する Coleman の教育観の変容

Coleman は、「楽器の多くは、児童によって作成された」³¹ と示しているが、A Children's Symphony に示されている写真を見ると、明らかにピアノとヴァイオリンが示されており、オーケストラ活動で市販の楽器が用いられていることがわかる。市販の楽器で演奏することは、児童を音楽から遠ざける原因になるという Coleman の指摘と、彼女が作曲したオーケストラの曲《A Children's Symphony No. 3》に市販の楽器が示されていたことには、矛盾が生じているように思われる。しかし、「非常に簡単な楽器に価値を得ていたころを過ぎ、市販の楽器で真剣に学習できる児童は、簡単な楽器に時間を浪費すべきではない。」³² という記述からも、市販の楽器をすべて否定しているのではなく、音楽的な発達段階に合わせて、その段階に達した児童に市販の楽器を与えていたことが明らかとなった。このことについて、初期の出版物や *Creative Music Series* では強調されていないが、A Children's Symphony では言及されている。これらのことから、市販の楽器を使用することに対する Coleman の対する捉え方が、1920年代から1930年代に変容したことがわかる。

1930年代に定式化した Coleman の音楽教育観

A Children's Symphony に示された「結論」は、1920年代から1930年にかけて定式化された彼女の音楽教育観を端的に示すものであると考える。特に、「他の方法ではうまくいかない多くの児童」、「児童が有能かどうかに関わらず」、「別の方法ではできない何人かの児童」という記述には、音楽的才能をもたない児童に対する配慮がみとれる。第4学年から第6学年までの児童はすべてオーケストラ活動に参加していたが、音楽的才能をもつ児童もそうでない児童も、「1人も脱落することがない」³³ と示されていることから、オーケストラ活動はどちらの児童にとっても、有益な経験となりえた活動であったといえるだろう。

オーケストラ活動の展開

Coleman は、リズムバンドと一般的な学校オーケストラの双方の活動の限界について述べ、自身のオーケストラを、その中間をとるものであると解している³⁴。彼女は、リズムバンドの問題点（リズムを重視するために、教師の配慮がなければ雑音になる可能性が高いこと、他の音楽経験に結びつかず、児童の興味を引き続けられないこと等）と、一般的な学校オーケストラ活動の問題点（プロの楽器を扱うことが難しすぎること、有能な児童だけが選ばれること等）を考慮し、自身のオーケストラの活動を展開していたといえる。

創造的音楽の授業から派生したオーケストラ活動

第3学年では、主に楽譜を用いることなく、グラスを中心とした学習が展開される。または、上級学年の児童が製作したマリimbaでの演奏が行われる。第4学年では、ドラムを製作することとドラムの演奏が行われる。また、ドラム演奏のために基本的な音楽的知識（特に、音価）に関する学習が行われる。第5学年では、パン・パイプ等の管楽器を中心とした学習が展開される。これらの楽器は、歌唱の学習と密接に関連している。また、旋律を演奏するために五線譜を読む学習が始められる。第6学年では、マリimbaを中心とした学習が展開される。また、プサルテリーで旋律と和声の両方を演奏する活動も行われ、それを用いて創作が行われる。これらの記述と、《A Children's Symphony No. 3》に示された楽器を担当する

³¹ Coleman, *A Children's Symphony*, op. cit., p.121.

³² Ibid., p.23.

³³ Ibid., p.45.

³⁴ Ibid., p.35.

学年が一致することから、オーケストラ活動は創造的音楽の授業から派生し、それをもとに展開されたことは確かであるといえる。

4. Lincoln School における音楽教育の特質

以上の書籍から、Lincoln School における音楽教育について、以下の結論を導き出した。

①音楽科の領域と構成

音楽科の内容は、「A. 歌唱」と「B. 創造的音楽」の2領域で構成されている。特に、「B. 創造的音楽」の内容は、楽器づくり、創作・即興、器楽演奏、歌唱演奏、音楽理論、ダンス、聴取等にさらに細分化でき、複数の活動が包括的にまとめられている。同大学附属校である Horace Mann School や Speyer School では、歌唱や音楽理論、歌づくりを含む「正課」、「音楽鑑賞」、「器楽演奏」の3領域で、音楽科カリキュラムが構成されている。また、1916年に出版された進歩主義音楽双書では、「聴取」、「鑑賞」、「視唱」の3領域で構成され、MSNC 教育委員会報告書に示された教育課程では、聴唱と視唱を含む「歌唱」と「鑑賞」の2領域で構成されている³⁵。このことは同時期の音楽科の学習領域が、大きく分けて「歌唱」と「鑑賞」に分けられていたことを示している。Lincoln School の音楽教育は、楽器づくりという活動の特異性のために着目されたが、この点でも一般的な音楽教育と、性質を異にしている。

また、「A. 歌唱」と「B. 創造的音楽」の活動は、他教科と相互に関連しながら行うように意図されている。特に、「B. 創造的音楽」では、教科関連性が強調されている。これは一見、コア・カリキュラムに似た形を取っているのだが、コア・カリキュラムが一般原理を各教科の中核に置くのに対し、この教科間関係性は、創造的音楽の学習内容を中核に置き、その内容に基づき複数の教科が配置されている。これを、筆者は、「個々の教科の枠には手を触れず、複数の教科の相互に関連の深い内容が並行して学べるように配列するもの」³⁶ と解した。これらの記述から、1920年代前半に展開された創造的音楽は、包括的な学習領域を含みつつ、部分的に教科カリキュラムの統合をとり、相関カリキュラムの性質を有していたといえる。

②対外的な性質をもつ音楽活動

Lincoln School での集会における音楽活動は、そのほとんどが授業としての創造的音楽から展開した活動である。授業としての創造的音楽は、児童の活動を主体とし、自発的な活動を常に奨励していたために、経験主義の性質が強く現れている。一方、創造的音楽が集会での音楽活動として行われる場合は、他の児童あるいは保護者等、他者に対し表現するという対外的な活動が比重を大きく占めたために、教師の支援無しには成立しえない活動になった。Coleman が《A Children's Symphony No.3》を作曲したことやヴァイオリンの講師 E. Mellen が勤務していたこと³⁷等から、この音楽活動に教師が関与していなかったとは考えにくい。また、教師の教育的介入無しに小学校の児童のみで質の高い演奏を行うことは困難であり、対外的な活動であったために演奏の成果が求められていたことは容易に想像できる。これらのことから、音楽活動は授業としての創造的音楽とは対照的に、対外的な性質を有した活動として展開されたと考える。

③作業単位における音楽科の内容

同校の出版物を検討した結果、「大単位」のいくつかで、音楽科の内容が主題の中心に配置され、各教科が配列されていたことが明らかとなった。またそのなかで、音楽科は以下の2つの学習を展開していた。それは、歌唱と創作を中心とする音楽学習と、劇化やごっこ遊びを中心とする音楽学習である。前者は、教科の枠を取り払わず示された音楽科の内容であり、後者は、美術や技術等其他の教科と統合化された内容である。つまり、1920年代後半に展開された作業単位において音楽科は、音楽科と他教科との統合という、2つの性質を有した音楽学習を展開していたと考える。

④経験から知識へという学習の筋道

Lincoln School では、Coleman を含め3人の音楽教師が勤務していたが、同校の出版物では彼女の教育思想が強く反映されている。このことから、同校の音楽科は Coleman の音楽教育観に強く影響されてい

³⁵ 前掲書1, pp.245-341。

³⁶ 磯田一雄「教科カリキュラム」『新教育学大辞典 第2巻』第一法規出版, 1990, p.405。

³⁷ Lincoln School, op. cit., 1925, p.12。

た可能性が高い。彼女は児童の性向に即した学習を展開しており、教師主導型の授業とは全く性質の異なる指導を行っていた。Colemanの音楽教育観は、「有能であるかどうかに関わらず、すべての児童が参加できる」³⁸という記述に集約され得る。学習の初期段階では、非常に簡単な内容が設定され、児童の音楽的な成長に合わせ、徐々に学習が発展する様子が著書からみてとれる。これは、児童の興味や関心に即したものであり、自発的な学びを尊重したものである。Colemanの音楽教育実践には、児童中心主義の特徴をみることができ、またその主義に立脚していたことは明らかである。

Colemanは、さまざまな分野の専門家の意見や見解を引き合いに出しながら、自身の教育実践の立場を明らかにしている。特に、イギリスの哲学者H. Spencerの考えは、彼女の教育を論理的に支えたものであると考える。Colemanは著書に、「経験は、知識に先行しなければならない。」³⁹と示し、音楽的知識を獲得せずとも、ピアノを弾くこと、教えることは可能であり、そのことはむしろ「自然の理に合っている」⁴⁰と述べている。これらのことから彼女の音楽教育観では、経験から知識へという過程が重視されているといえる。

⑤音楽教育実践にみられる学習内容の限定化

子どもの自然な音楽的成長に沿って、単純なものから始めるべきであるというColemanの考えにあるように、すべての活動は易から難へ、学習が設定されていた。例えば、歌唱活動では、会話を歌で歌うことから始められ、楽器づくり活動では、グラスに水を入れることから始められる。彼女は、学習者の音楽的成長に見合わない内容の学習は、その時点で無理に与えるべきではなく、延期すべき内容であると考えていた。これらの学習の限定および延期は、学習者の学びを制限するものではなく、学習者の成長を考慮し行われたものである。延期された学習は、学習者が必要であるという認識をもたない限り、彼女から与えられることはない。つまり、学習者の学びを尊重し、その学習に対する知的好奇心が芽生えるまで、学習は限定化されていたといえる。

5. 引用・主要参考文献

- ・荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001。
- ・Boston, C., SATIS. N. COLEMAN (1878-1961) Her Career in Music Education, Ph.D. Dissertation, University of Maryland College Park, 1992.
- ・Buttenwieser, P. L., *The Lincoln School and Its Times, 1917-1948*, Columbia University, Ed. D., 1969.
- ・Coleman, S. N., *Creative Music for Children*, G. P. Putnam's Sons, 1922.
- ・Coleman, S. N., *Creative Music for Schools, Book 1, The Beginning of Music: The Making and Use of Instruments for Rhythm*, The Lincoln School Experiment Edition Book1, 1925.
- ・Coleman, S. N., *First Steps in Playing and Composing*, The John Day Company, 1930.
- ・Coleman, S. N., *The Marimba Book*, The John Day Company, 1930.
- ・Coleman, S. N., *The Drum Book*, The John Day Company, 1931.
- ・Coleman, S. N., *A Children's Symphony*, Bureau of publications of Teachers College Columbia University, 1931.
- ・細谷俊夫・奥田真丈・河野重男・今野喜清編『新教育学大事典 第2巻』第一法規出版、1990。
- ・Lincoln School, *A Descriptive Booklet*, The Lincoln School of Teachers College, 1922.
- ・Lincoln School, *A Descriptive Booklet*, The Lincoln School of Teachers College, 1925.
- ・松村将「リンカーン・スクールーその歴史と意義ー」『京都女子大学教育学科紀要』第43号、2003、pp.87-100。
- ・佐藤学『米国カリキュラム改造史研究ー単元学習の創造ー』東京大学出版会、1990、pp.186-224。
- ・The Staff of the Elementary Division of the Lincoln School of Teachers College Columbia University, *Curriculum Making in an Elementary School*, Ginn and Company, 1927.
- ・The Lincoln School of Teachers College, *Some Uses of School Assemblies*, The Lincoln School of Teachers College 425 West 123rd Street, 1922.

³⁸ Lincoln School, op. cit., 1922, pp.60-61.

³⁹ Coleman, *Creative Music for Children*, op. cit., p.16.

⁴⁰ Ibid.